

命の大切さ

天王小・6 若林 聖紘

二〇二五年八月二日、愛犬のココが亡くなりました。十八才と一か月半でした。

ココちゃんは、ぼくが生まれた時にはおばあちゃんの家におりました。ぼくが五才のとき、ココちゃんのことをとてもかわいがっていたひいおばあちゃんが亡くなってしまったため、ぼくの家で飼うことになりました。それから七年間いっしょに過ごしました。

ぼくが小学校から帰ると、いつもお出むかえをしてくれました。うれしそうにしっぽをふって待っていてくれるので、毎日毎日帰るのが楽しみでした。

ココちゃんのお世話は家族で分担していました。ぼくはお水をかえたりトイレシートをかえたりしていました。ココちゃんは、かわいくて、あまえんぼうで、食いしんぼうで、人なつっこくて、ボール遊びが大好き。ご飯の時間になるとしっぽをふってそわそわします。おくびのような性格もあるので、後ろから急にさわるとかまれません。ぼくもかまれたことが何回もあります。最初は痛くて泣いていたら、ココちゃんが、

「ごめんね。」

と言っているようになめてくれました。かわいかったです。昼ねをしていると、布団に入ってきてくれました。

ココちゃんは今まで病気にかかったことがなく、元気に暮らして

いました。しかし、今年の五月、ゴールデンウィークのある日、ご飯を食べず、右にかたむいていくようになりました。様子がおかしいと病院に行きました。採血をしたら、えんしょう反応が高いと言われ、こう生ざいを飲むことになりました。最初はご飯を食べることができなかつたけど、薬が効いてきたのか、ご飯を食べられるようになってきて、元氣も出てきました。

二週間後、病院に行きました。ぼくは元氣になっておもうていました。しかし、採血をしたら、えんしょう反応がまだ高く、先生に、

「今までの薬が効いていないということは、脳にしゅようがあるのかもしれない。ただ、ココちゃんは高利いなので、まずいをして頭の検査をすることがむずかしいと思います。」

と言われました。そのため、お父さんとお母さんは、検査をせずにかん和ケアというしょう状をやらげることを選たくしました。

ココちゃんは病氣になつてから、後ろ足が動きにくくなつて、前足だけで移動するようになりました。トイレが上手にできにくくなつたので、おむつをはかせたり、だっこをしてお水を飲ませたりしました。

夜中に鳴くようになったので、お母さんはね不足になりました。大変そうだったので、土曜日など次の日に学校がない日は、鳴いたらすぐにお世話ができるようにと、ぼくはリビングでいっしょにねむりました。ちよつとでもお母さんがねむれるように、そして、ココちゃんといっしょにいたいという氣持ちで、ねむりました。

でも、次第に元氣がなくなり、ご飯も食べられない日が三日続きました。だから、病院に連れて行つたら、

「おむかえが近いかもしれません。」

と言われました。お家に帰ってもココちゃんはいつものようにねむっていました。

その日は、ちょうど家族全員がそろって家にいたので、なでたり声をかけたりしました。いつもと変わらずねむっていたので、お父さんとお母さんが、

「ココちゃんを見るね。」

と言ったので、ぼくたちはしん室に行きました。

しばらくすると、お父さんがぼくたちを呼びにきました。リビングに行くとき、ココちゃんは動かなくなっていました。体はまだ温かいのに。

「みんながねに行ってしばらくしたら、呼吸が止まったんだよ。」とお母さんが言いました。その日は家族みんなでたくさんココちゃんのことをなで、たくさん泣きました。

次の日、家族みんなでココちゃんのおそう式をして、納骨もしました。納骨するまではただただ悲しかったけど、ちゃんと最後まで面どうを見て、家族みんなでお見送りできたので、心残りはありませんでした。

まだちょっとココちゃんがない生活はさみしいです。だけど、天国からココちゃんが見ていると思うと、しつかり生きようと思えます。ココちゃんのおかげで命の大切さを学ぶことができました。

ココちゃんありがとう。